

英語が導いてくれた天職

江口 裕之

幼い頃から洋楽を聴いていた私は、自然とギターやドラムといった楽器に興味を持つようになり、中学時代には自分のバンドを持つようになっていた。70年安保闘争の熱が冷めやらぬヒッピー運動の時代、長髪のバンドマンだった私は、当時の中学生から明らかに浮いていた(笑)。それが、校規が厳しい高等学校ではなく、学風が自由な高専への進学を決めた理由の一つだった。

高専での専攻は化学工学であったが、科学好きの私にはあつらえ向きだった。同時に、才能ある音楽仲間と出会う幸運にも恵まれ、5年間をバンド三昧で過ごすうちに、職業として音楽を意識するようになった。

卒業年の1978年、私たちは山口県岩国市にある米軍基地の専属カントリーバンドとしてプロ活動を始めた。その「壁の向こうのアメリカ」で出会ったのがネイティブの英語であった。カントリー音楽では歌詞が重要であるため、演奏力に加えて英語力も磨かないとやっていけない。私は必死で英語学習を始めた。4年後の1982年、バンドは東京へ進出、東京ディズニールンドを含む様々な舞台でカントリーをやったが、カントリーの真髄を究めるには、根本から英語を学び直す必要があると感じるようになった。

そこで4年後の1986年、活動拠点を熊本に移し、夜はカントリーバーで演奏、昼は英語学習に没頭できる環境を作り、7カ月後に英検1級を取得した。その際、運よく英検協会から成績優良賞と文部大臣賞をいただき、地元新聞に私の紹介記事が出た。

当時、熊本の県知事は後に総理大臣になる細川護熙氏で、熊本テクノポリス構想を唱えてリサーチパークの整備を進めており、海外からの視察団も頻りに訪れていた。市や県は科学に強い英語通訳士を探していて、記事を読んだ関係者から早速通訳の依頼が来た。高専で磨いた科学の知識がここで役に立つようになる

とは思ってしなかった。

以後、夜は演奏、昼は通訳と、二足のわらじの生活となったが、転機は翌年訪れた。熊本市が米国テキサス州サンアントニオ市と姉妹都市になり、使節団来日時の市長専属通訳に抜擢された。今度は科学と違い文化交流である。文化の知識など皆無であった私は大きな壁にぶつかってしまった。そこで出会ったのが通訳案内士試験という国家試験だった。試験では外国語能力だけでなく、日本の地理・歴史・一般常識を含む日本文化の知識が求められる。試験内容を見た私は、渡りに船とばかりに日本文化の学習を始め、1988年に一発合格を果たした。

翌年、音楽から足を洗い、予備校の英語講師として東京に舞い戻った私は日本文化研究に没頭するようになり、全国を歩き回った。その間、いろんな雑誌に日本文化を英語で紹介する記事を書いたが、The Japan Timesの編集者からその内容を一冊の本にしようと言われた。それが2001年に出版された『英語で語る日本事情』(現、『新・英語で語る日本事情』)である。同時に、自らの英語教育の理念を実現するために新宿にCEL英語ソリューションズを設立し、以後、通訳案内士の育成を天職と考えてきた。2008年、私の本を読んでくださったNHKエデュケーショナルのプロデューサーが突然来校され、日本文化を英語で紹介する新番組の講師を依頼された。番組名は『トラッドジャパン』。番組作成は私の集大成とも言える仕事になった。

振り返れば、音楽と科学と日本文化、一見、どれも無関係の分野に思えるが、それらを一つの物語に織り成し、私を天職に導いてくれたのが英語であった。現在、英語を学んでいる高校生たちにはその物語はまだ見えない。しかし、英語が彼らにとって生涯の宝になることは間違いない。高校英語教員の方々にもそのことをぜひ生徒たちに伝えていただきたい。

江口 裕之 えぐち ひろゆき

1957年長崎県生まれ。国立北九州高専化学工学科卒業後、プロのミュージシャンとして全国で演奏活動を展開。その後、通訳・翻訳家として活躍。1989年から一貫して通訳案内士の育成に携わる。2001年1月、東京に英語学校のCEL英語ソリューションズを設立。現在、最高教育責任者。2009年4月～2012年3月、NHK Eテレ「トラッドジャパン」講師。著書に『新・英語で語る日本事情』(The Japan Times)、『英語で伝えたいふつうの日本』(DHC)、『日本まるごと英単語帳』(NHK出版)他。音楽CDに『My Good Ol' Songs』(アソル・ハーモニクス)がある。

